

研究課題	大正大学図書館所蔵新大仏寺旧蔵聖教の整理・調査
研究代表者	苦 米 地 誠 一（仏教学科 准教授）

I. 研究の目的

昨年度の報告でも述べた通り、伊勢（三重県）伊賀市に所在する新大仏寺は、建長2年（1202）、鎌倉幕府初代将軍源頼朝（1147～1199）の開基として、東大寺復興に活躍した大勧進俊乗房重源（～1193）を開山として開創された東大寺末の伊賀別所であり、後鳥羽上皇（1180～1239）の勅願所として栄えた古刹である。奈良と伊勢を結ぶ伊勢街道は、伊勢で製造された瓦を南都へ運ぶための運搬路であり、重源は東大寺再建のための瓦運搬の中継地として、伊勢街道の途中に伊賀別所新大仏寺を創建したとされる。現在でも創建当初にさかのぼる鎌倉時代製作の木造如来坐像附石造基壇、木造俊乗、板彫五輪塔などの重要文化財を所蔵する。

しかし南北朝の動乱や火災による伽藍消失のために長く衰微し、後述するが松尾芭蕉（1644～1694）は『笈の小文』の中でその破滅の状況を伝えている。江戸中期に復興されたが、それ以来、新義真言宗智山派末の学問所として栄えてきた。中世末から近世中頃までの衰微によって、中世期の聖教類はほとんど散逸してしまい現存しないものの、江戸期に新義真言宗の学問所になった関係で、江戸期を中心とした数々の聖教を集積するところとなった。

大量の新大仏寺所蔵聖教群の内容は、真言宗にとどまらず、律宗・天台宗・華嚴宗・浄土宗・禅宗等、各宗派に関する聖教が広く収集されており、このことは諸宗の教学を兼学するという、中世以来の学問所としての性格を伝えているといえよう。しかし新大仏寺所蔵の聖教群はその後、寺外に流出した。写本類を中心とした一部の聖教は、早く散逸していたために失われているものもあり、その内の一部は古書店を通じて市場に流出しているものも見られる。

この度幸運にも、新大仏寺聖教の大部分を大正大学図書館が一括購入したことにより、新大仏寺に伝えられてきた貴重な寺院資料の散逸を防ぐとともに、江戸期の学問所寺院の研究における素材としての利用が可能となった。

本研究の目的の第一は、新大仏寺旧蔵の聖教群について、目録の作成を通じて、一つの地方寺院がどの程度の規模の聖教群を所蔵していたのかを明らかにすることにある。またその聖教群の内容から、近世寺院が、特に新義真言宗の学問所性格を有した新大仏寺が、どのような系統の聖教を収集し、所蔵していたのかを研究し、当時の（新義真言宗の）僧侶・学匠達がどのような聖教を用いて学んでいたのか、教学的分野の解明もその目的となろう。

そして、この聖教群を一つの知の集積として、近世における知的再生産の構造を明らかにすることも可能であると思われる。また個別の聖教としても、勿論重要な研究対象となる。第二に印刷文化・出版文化研究の視点からも、近世の寺社聖教群は高い注目を集めている。新大仏寺旧蔵の聖教群も、現在に伝わる新大仏寺の近世に発展した学問所としての性格から、やはり近世に京洛で出版された版本が多いという特徴がある。つまり同聖教群が、いつ、どこで出版されたのかを把握することで、新大仏寺による聖教の収集の年代状況が明らかにされ、また出版地・書肆の解明によって、江戸期における書籍・典籍の流通状況を明らかにすることが可能となり、寺院と出版元との関係といった流通経済史・および出版史という分野においても、貴重な情報が提供されることが期待される。研究課題の計画・方法については、前報告の通り、購入時に作成した荒目録に基づく書誌データの採譜することが最優先課題であり、可能な限りの書誌情報を採取し、より正確な目録の作成を目指すものである。目録作成に関しては、内容別に分類作業を行い、整理・研究の円滑化をはかっている。近年、目覚ましい展開を見せている各種の寺社聖教・文庫に所蔵される聖教・典籍の奥書・識語に関する研究も踏まえつつ、天台宗、新義真言宗（豊山派・智山派）、浄土宗など各宗の宗学研究（仏教学的・思想史的研究）だけではなく、歴史学や国文学などの諸分野も視野に入れつつ、近世寺院内部の知的生産体系という視点に基づく目録作成を目指すものである。

II. 研究の経過

今年度調査が終了した 140 余点の聖教類は、年代としては近世後期のものがほとんどであった。各聖教の書名については、『仏書解説大辞典』、『国書総目録』との照合を行ない、これらに掲載された書名を確定書名（標題）として採用することで、目録作成後の利用の便を考えた。今年度調査した聖教類は多くが版本であり、その印行・出版に関する書誌情報が多く確認され、江戸期の出版を考える上で貴重な情報を得ることができた。また、朱書による書き入れや訓点も多数確認でき、これらの情報から当時の僧侶達の学問的関心がどこにあったのかを知ることができよう。今年度も昨年度に引き続き、書誌データの調査と調査カードの作成といった基礎作業を中心としてきたが、そこに時間を要した。

III. 研究の成果

「新大仏寺旧蔵聖教の整理・調査」を 3 年にわたって行ってきた。その結果いくつかの疑問点も出てきた。今年度の研究ではその疑問点も踏まえ、「新大仏寺史」について結果報告する。

新大仏寺に関する研究は多くはない。そのほとんどが俊乗坊重源関係のものである。主要な先行論文および簡単な内容を以下に挙げてみたい。

「伊賀新別所新大仏寺に就いて」村治圓次郎著（南都佛教研究会編『重源上人の研究』所収 昭和 30 年）、「伊賀新大仏寺の経営」（小林剛著『俊乗坊重源の研究』所収 昭和 46 年）の 2 本の論文では、東大寺伊賀別所としての新大仏寺の縁起等について研究されている。

『伊賀新大仏寺発掘調査報告書』荒木伸介著（新大仏寺 昭和 54 年）では発掘調査報告書が出版されている。「新大仏寺と重源上人」伊東史朗著（『月刊文化財』221 昭和 57 年）では、京都博物館で開催された「新大仏寺本尊阿弥陀如来像修復記念の特別陳列」についての説明、また、重源関係の展示説明、新大仏寺に関しては東大寺七別所を表にして新大仏寺と他の別所を比較しているものである。

以上のように、新大仏寺に関する論文は重源を中心にした研究がほとんどであり、近世の新大仏寺を中心に研究されているものは皆無に等しい。そこで、今研究では大正大学図書館所蔵新大仏寺旧蔵聖教が収集された近世（江戸中後期）においての新大仏寺について考えてみたいと思う。

新大仏寺の建立時期についてであるが、新大仏寺は俊乗坊重源の草創であり建立に関する記述が何点か見

られる。

『南無阿弥陀仏作善集』¹⁾「丈六佛像員数」には以下のようにある。

伊賀別所三躰此外石像地藏一躰

伊賀別所

ト五古霊瑞地、建立一聚別所、當其中古崎、引平巖石、一堂立、佛壇大座皆石成、奉安置皆金色彌陀三尊來迎立像一躰并観音勢至各丈六

鐘一口至肩長四尺、湯屋一字在釜

皆金色三尺釋迦立像一躰、優填王赤栴檀像第二轉畫像奉摸作之、御影堂奉安置之、摺寫十六羅漢十六鋪、同御影堂安置之

とあり、東大寺伊賀別所として丈六の來迎彌陀三尊像を安置した堂宇、釜を備えた湯屋と金色の三尺如来立像等を安置した御影堂があったことがわかる。

また、『大日本史料』四編之七及び『俊乗坊重源史料集成』所収『伊水温故』²⁾では以下のようにある。

五寶山新大仏 富永村

左薬師如来、長二丈三尺、立像、

本佛阿彌陀、長二丈五尺、立像、三尊共木造石座、

右観音大士、長二丈三尺立像、

（中略）

當國高野産、生姓阿波、俊乗坊重源、建仁二年に開基也、山州醍醐山の坊名此坊二而学ぶ、建久元年に南都大仏殿造畢す。其明る建久二年より十二年目、建仁二年に阿波大佛開基、

山の形者、龍の蟠かことし、龍頭に鐘樓堂、中央に本堂有、龍尾に重源の影堂有、自作の木像を安置す、寛永の末本堂破壊し、本尊三體は事無立なから、獅子身中の蟲とかや、自然朽終て、自然生の石臺のミ残り（下略）

このように、重源によって建仁 2 年（1202）に新大仏寺が建立されたことが記述されている。しかし『伊水温故』は伊賀国（三重県）の江戸前期の国学者菊岡如幻（1625～1703）が郷土史として貞享 4 年（1687）『伊水温故』に書かれたものであり、史実としての確実性には欠ける。また、現存する重源の「新大佛寺板五輪塔」の銘文には建仁 3 年（1203）9 月 15 日の期日が見られる。伊勢・志摩・伊賀の地誌である『三國地誌』³⁾では新大仏寺は建久七年（1196）に建立したとあるが、他の文献から考えて⁴⁾建仁 2 年（1202）には新大仏寺諸堂の何れかは建立されていたと考えるのが適当である。

また、新大仏寺が寛永の末に本堂破壊し、礎石のみが残っていることがわかる。

また、松尾芭蕉が貞享5年（1688）に記した『笈の小文』⁵⁾では以下のように記述されている。

伊賀の國阿波の庄といふ所に、俊乗上人の旧跡有。護峰山新大仏寺とかや云、名ばかりは千歳の形見となりて、伽藍は破れて礎を残し、坊舎は絶えて田畑と名の替り、丈六の尊像は苔の緑に埋て、御ぐしのみ現前とおがまれさせ給ふに、聖人の御影はいまだ全おはしまし侍るぞ、其代の名残うたがふ所なく、泪こぼるゝ計也。石の連^(連)台・獅子の座などは、蓬・葎の上に堆ク、双林の枯たる跡も、まのあたりにこそ覚えられけれ。

このように、芭蕉が新大仏寺を尋ねた際に、余りの荒廃を嘆いている。伽藍はなくなり礎石のみが残り、僧房は田畑とかわる。尊像は苔に埋もれ、髪の部分だけ拝むことが出来る。重源上人の尊像だけは残って、往時を思わせる。尊像の蓮台等が埋もれ、まるで釋迦の入滅後のような寂れ方であると記している。

このように、新大仏寺は『伊水温故』に記述があるように寛永年間（1624～1643）の末に本堂が崩壊し、その後松尾芭蕉の記述まで約40年間も修復されなかったことが判る。

新大仏寺は『三國地誌』に盛時には空坊、光坊、巽坊、松本坊、隅坊、岩坊、久保坊、宝蔵坊、池坊、真如坊、岡坊、東ノ坊の12坊があったと記されている⁶⁾。多くの坊がなくなり、唯一残った坊は東ノ坊だけであったようである。

それでは、近世末に新大仏寺はどのように多くの聖教を保有する大寺院へと再興していったのであろうか。

衰残の当寺を復興しようとして延宝9年（1681）9月22日、時の富永村庄屋彦右衛門が裏山の大仏山を、今までと同様に大仏殿諸堂の修理用に充てたいと、同山の下賜を嘆願している。この記述には寛永12年（1635）5月12日の大風雨によって大破したことが示されている⁷⁾。しかし、復興の記録がないことから、この時点では復興の願いは叶わなかったようである。

この後、享保11年（1727）に陶瑩が唯一残った坊、東の坊の住職に入ると、復興にむけて大きく進展する。新大仏寺に伝わる享保12年（1727）4月23日に書いた大仏再営願書「奉願大佛再営之事」⁸⁾には次のよう

形も破損し給ひ、唯今は佛面と御身之内少々残らせ候、ヶ様之遺跡拝觀之人ハ何も慨嘆仕事に候、此度何とぞ依衆力本尊を修補仕、佛殿等をも造営仕度候、當國并勢州和州之御領分諸土方を始め民家の門戸に入りて、振錫托鉢同断二人々志ほどの助力を受候事、御免と成下候様に奉願候已上

大佛寺勸化之比丘

陶瑩 印

享保十二未年四月廿三日

本寺平田文殊院

良英

（下略）

とあり、新大仏寺再営にむけて、勸進の許可を願ったのである。許可の後、大仏之御首、俊乗坊之像、千体仏、毘沙門、舍利塔、焰浮壇金之観音の六つの寺宝を持って勸進してまわった記録が残っている⁹⁾。

新大仏寺復興は、陶瑩の代ではかなわず、次の宝梁へと引きつがれた。そして延享5年（1787）4月19日上棟、寛延元年（1748）10月27日に入仏した。宝梁七二才、発願より23年の月日経っていた。寛永の大風雨により大破した堂宇は、110余年ふりに再興したのである。

以上のように、江戸中期に倒壊した新大仏寺は陶瑩・宝梁によって再興された。しかし、江戸後期の記録には「新大仏寺」という記述はそれほど多くない。この問題について考えてみたい。

新大仏寺の呼称についてであるが、『伊水温故』や『三國地誌』では「五宝山新大仏寺」と書かれていた。呼称では「新」を取って「大仏寺」などとも呼ばれていたようである¹⁰⁾。

新大仏寺には盛時12を数える坊があったことは先に述べた。その中で荒廃した後も唯一残っていたのが東ノ坊である。この他、上人坊（重源像の納められていた堂）が残っていたようであるが、陶瑩が享保11年に東ノ坊の住職になり、新大仏寺再興の願いを立てた事からも、実際に新大仏寺の管理を行っていたのは東ノ坊であったと考えられる。

しかし、再興の後なぜ「新大仏寺」の寺号が使われなかったのであろうか。

延享三年新大仏寺再建の見通しが立ち、時の住職宝梁が平田の文殊院の世話で、京都嵯峨野の大覚寺へその末派に加えられることを嘆願している。

その口上覚書のなかで寺号について以下のようにある。

先年御直末に被召加候節は、東ノ坊と書付差上（中略）今年之寺院御改めには任古号新大仏寺と書付

差上申候

とあり、先年「東の坊」にて書き付けて申請した、その後今年改めの際、古号である「新大仏寺」名で書き付け提出した。しかし、明和3年（1766）11月21日、一音が住職継目として本寺証文を藩に提出したところ、新大仏寺の名称は不都合であるとして許認されなかったのである。

そして、幕府寺社奉行牧野越中守の差配を仰ぐことになった。幕府は、たとえ旧記由緒あるとも半途にて廃絶の場合は、寺号山号ともに廃絶とみなした。また再建の場合も新寺同様に取扱うという通達であった。これには、新寺建立に対して徹底的な管理政策をとってきた江戸幕府の宗教政策の一端が見て取れる。以後、新大仏寺の呼称を使用することが許されず、東ノ坊の名称が新大仏寺の名称に取って代わったのである¹¹⁾。

以上のような理由で、地方史料である『伊水温故』や『三國地誌』では記述がある「新大仏寺」という記述が他の史料ではほとんど見られないのであろう。

IV. 研究の課題と発展

大正大学図書館が購入した伊州新大仏寺旧蔵の聖教群は、現時点で433タイトル（1507点）が確認されている。平成22年度で大部分の聖教が購入される予定である。新大仏寺における本報告の疑問点は採譜作業中の二重印記によるものであった。その結果、新大仏寺の呼称が2つ存在していたことがわかった。40項目に近い書誌データの採譜項目を採用した結果、このような疑問点に気づくことが出来た。

採譜内容から見ても、新大仏寺の聖教群の一面に、収集の偏りなども見られる¹²⁾。

上記の点を踏まえ、継続して採譜作業、目録作成を中心とした研究活動が続けまた、他寺院所蔵（「智山文庫」「海住山寺聖教類」「大須観音真福寺」「長谷寺所蔵聖教類」等）の聖教類との比較検討を考えて行くことが必要であると考ええる。

註

- 1) 東大寺を再建した俊乗坊重源の大仏殿再興に関連する生涯の浄土信仰、修善事業、経巻納入、別所建立に関する記録で1巻。『俊乗坊重源史料集成』にも数多く掲載され、新別所建立に際して詳細な記録が残っている。
- 2) 伊水温故：いすいおんこ。江戸時代の国学者、菊池如幻（行宣）に依って書かれた郷土史4巻。貞

享4年（1687）著。昭和8年伊賀市史談会出版。

- 3) 伊勢・伊賀・志摩三国に関する地誌書。巻57～82までが伊賀。『大日本地誌大系』所収
- 4) 『日本歴史地名大系』24巻 三重県 p745や『俊上房重源の研究』小林剛著 昭和46年所収「伊賀新大佛寺の経榮」によると、重源が建久8年（1197）に書き出した重源議状に高野別所や他の別所の記述があるが伊賀別所の記述がない等から建久8年には新大仏寺は建立されていなかったと記している。
- 5) 松尾芭蕉の紀行文（未定稿）貞享4年（1687）10月25日に江戸を立ち、東海道を下り伊賀・伊勢・吉野・和歌浦・高野・奈良・須磨・明石などを巡った紀行文である。
- 6) 『日本歴史地名大系』24巻 三重県 p745。
- 7) 『日本歴史地名大系』24巻 三重県 p745。
- 8) 『俊上房重源の研究』小林剛著 昭和46年所収「伊賀新大佛寺の経榮」に記述あり。この他陶瑩が記した『伊州新大佛寺再興記』等に再興の願書の記述が見られる。
- 9) 『日本歴史地名大系』24巻 三重県 p745。
- 10) 『日本歴史地名大系』24巻 三重県 p745。
- 11) 『日本歴史地名大系』24巻 三重県 p745・745。また、『江戸幕府寺院本末集成』中 p1446においても、「以上本末文殊寺文／（中略）／同郡富永村／東之坊本寺嵯峨大覚寺」とあり、東之坊として書き付けられていたことがわかる。
- 12) 『平成19年度大正大学学術研究助成研究成果報告書』・『平成20年度大正大学学術研究助成研究成果報告書』所収「大正大学図書館所蔵新大仏寺旧蔵聖教の整理・調査」 苫米地誠一